

留学先決定に至るまでの経緯

野中玲央

1 はじめに

2025 年 9 月よりイェール大学経済学部博士課程へ進学予定の野中玲央 (のなかれお) と申します。京都生まれですがほぼ長崎で育ち、諫早高校を卒業した後東京大学に進学し、現在は同大学経済学研究科博士課程に所属しています。ミクロ経済学の理論を専攻しており、現在は多数財オークションの研究をしています。

2 留学を考え始めたきっかけ (学部 1 年～学部 3 年春)

もともと数学が好きで東大には理科 I 類で入学しましたが、これから社会に出ていく上で数学を使おうとは思っておらず、学部 1 年～2 年の時期は就職をしようと考えていました。組織の意思決定に興味を持って経営学の本を読むなどしていました。進学選択で経済学部を選択し、経営学の研究を行いたいと考えていました。ただ、経営学の勉強があまりうまくいかなかったことと、経済学の勉強が思いのほかうまくいったことから、経済学を勉強することに決めました。社会に出るみたいなことはあまり考えず、自分の好きなことを続けていく方が良いのではないかと考えたということです。

その後も就職することを主に検討していましたが、少し勉強を真面目にやりたいと思い、経済学部で大学院進学を目指す人たちの集まる discord のグループに入れてもらいました。経済学部全体の Slack によく連絡を流す中心的な人がいて、その人なら勉強も真面目にやっているだろうと思い DM をしたのがきっかけです。経済学部の中で大学院に進学するのは 1 割ほどであり、その discord の特殊な雰囲気驚いたことを覚えています。これが学部 3 年生の春頃であるため外資に応募する可能性も考えると就職活動を行うかどうか決めなければならない時期でした。そこで再度先ほどの影響力の強い人に経済学のアカデミアに進む場合どのくらいの確率で職を得ることが可能なのか、どのようなルートが存在するのか聞きました。それで、海外の大学院に留学できれば職はあるだろうという返答をもらい、アカデミアに進むことを決めて大学院留学のために勉強を頑張ることを決めました。

3 留学のために必要なもの (学部 3 年春～修士 2 年春)

留学に必要なものは TOEFL100 点以上、コアで良い成績を残していること、出版可能な研究成果の 3 つです。実際には推薦状や SOP が必要ですが、それらが競争力のある形で用意できるために学部 3 年のうちから目標とすべきことが上の 3 つだということです。

TOEFL100 点は多くの大学で足切りとして用いられています。私は M2 の 4 月末に 108(R30L28S22W28) を獲得してクリアしました。大学院入学時と M1 の 11 月頃に受けたものはどちらも 94 点でしたが、そこから半年間勉強して 14 点ほど上げることができました。94 点を取った時の内訳は R27L23S19W25 であり、そこから全セクションで 3 点くらいずつ点数を上げました。この間に行った対策としては類義語の勉強と冠詞や複数形への意識の 2 つが挙げられます。類義語の勉強としては、知らなかった単語の意味を調べるだけでなくその単語の類義語も調べるようにしました。また知っている単語であっても類義語を知らないものがあればそれも調べるようにしました。Writingなどで単語を使うときは類義語との比較をしながら単語を使うことを意識しました。冠詞や複数形への意識はリスニング対策で特に重要でした。冠詞や複数形はものや人の状態を伝える上で情報量の大きいものですが、日本語にあまりない影響で意識しづらいです。そのため冠詞や複数形を意識して聴くことで英語の情報量をそのまま受け取れるようにしました。

コアの成績を出願で用いるのは経済分野特有だと思います。まず、コアとは経済の大学院における必修科目のことです。コアはミクロ経済学、マクロ経済学、計量経済学を教えます。この内容は全世界で割に統一されているので、コアで良い成績を取ったことは優秀さのシグナルになります。私の専門分野はミクロ経済学なので、ミクロ経済学で高い順位を取ることを目標に授業を受けました。結果的にミクロ経済学 I が 1 位、ミクロ経済学 II が 4 位となって出願には問題ない結果となりました。MIT などのトップ校に合格したい場合はどちらも 1 位であった方が良かったのですが、私には難しかったです。

研究成果については、修士 1 年の春に出した結果を出す形になりました。数学的には美しい結果でしたが、応用先が限られるものであったためパッケージングにかなり苦労しました。より結果を良くするために主要な結果の拡張を

行いましたが、元々の問題は解決されていないように感じます。学部生の間は数学的な問題に集中する方が研究結果を出しやすいですが、そこから修士2年の間で数学的な結果がどの程度経済的に嬉しいのかをアピールする訓練をたくさん行うことが重要だと思いました。私はこの訓練を頑張ったつもりでしたが、MITに受かるには不十分だったと思います。

4 出願準備 (修士2年春～修士2年秋)

上の3つがある程度形になった上で、M2の1年間は出願準備に追われました。推薦状は学部3年時ごろから決めていた3人をお願いしました。3人ともにその頃から留学したい意向を伝えていたので、3人とも快くOKしてくださいました(と思っていますが、客観的にはどうかはわかりません)。少なくとも学部3年の頃から私の推薦状を書く前提で私を見て育ててくださった先生方であり、そこは大きなアドバンテージだったと思います。

SOPについてはSOM2023の白川亮さんにアドバイスをいただきながら完成させました。白川さんのSOPを参考にしながら、できるだけ簡潔で見やすいSOPを心がけました。ただ個人的にはもっといろいろな人にも見てもらうべきだったと感じています。実際、Harvard大学の教授に研究ミーティングでお会いした後の雑談で出願についてお聞きするとSOPに関する回答が返ってきたこともあり、SOPのクオリティは(彼の言葉を借りると)“intellectual maturity”を査定する上で重要なのだと思います。

ライティングサンプルは上述した学部4年時の研究成果を提出しました。その他の提出物についてはただ要件に従うだけですが、13校出願するとなると作業量が私にとってはかなり多くなり、私にとってはかなり苦しかったのを覚えています。ミスをしてしまうと人生に関わる一大事なので「電話番号は正しく入力されているか?」「Writing Sampleのページ数などの規定を満たしているか?」といった40個ほどの細かいチェック事項を作り一つずつ確認していきました。

5 出願先の決定

経済では10から20校ほど出すのが一般的で指導教員と話し合っただけで出願先を決めました。5月ごろに指導教員に出願先を決めたいと話したところ「今は英語と研究に集中しなさい」と言われたのでその通りにしました。10月頃に再度相談するとおおよそトップ10しか勧められませんでした。英語については5月末に結果が出ていましたし、研究は5月から10月の間であまり進んでいるように感じなかったのも、指導教員は最初からトップ10を勧める気だったのかもかもしれません。私の指導教員には13校以上は推薦状を書かないと言われていたのですが、実際13校くらいが出願コストを考えても最適なのではないかと思っています。1校あたり出願するだけでも2万円くらいかかりますし、出願フォームを埋めるだけでも大変な作業だからです。

6 進学先の決定 (博士1年春)

出願結果は以下のとおりです。

合格 (accept) : Yale(進学), Princeton, Northwestern Econ, UC Berkeley

不合格だが、不確かなもの : NYU, UPenn, Northwestern Kellogg, Columbia

不合格 (reject) : MIT, Harvard, Stanford GSB, Stanford Econ, UChicago

不合格だが不確かなものとは以下のいずれかの学校です。

- ・NYU, UPennについては「あなたの資料はとても良かったのですすでに受かっている学校を知りたい」というメールをいただいたのでYale, Princeton, Northwestern Econに合格していることを伝え、「そちらにぜひ行ってください」と言われました。

- ・Northwestern KelloggはNorthwestern Econに不合格になって初めて選考が始まるため、不明としました。

- ・Columbiaは面接に進みましたが、すでにYaleに受かっていたのでwithdrawしました。

私が出願した年度はトランプ政権の影響で政府からの支援を減らされている大学も多く、採用するPhD学生も減らされている傾向にありました。そのため上の文章でMITに受からなかったのはコアの順位が悪かったからじゃないか、研究結果のパッケージングがうまくいかなかったからじゃないかなどと書いていましたがそこまで落ち込む必要はなく、単に今年の競争が特に激しかったと考える方が良いと思います。

受かった大学にはVisitに行きました。Visitに行く前に先輩や指導教員と相談しましたが、普通に考えたらPrincetonだと言う人やYaleが良いと言う人など様々でした。そのため研究分野を第一として最終的には大学の雰囲気や決めようと思ひVisitに臨みました。

Visitはコミュニケーション能力が問われて本当に大変という話を聞いていましたが本当にそうで、朝から晩までたくさんの人と話さなければなりません。ただ同期になる予定の学生や教授と話すのはかなり価値のあることでとても楽しかったです。同期の学生たちは当たり前ですが私が全く考えられない人生を送っている人たちがばかりで、話を聞いていて面白かったです。これからPhDという良くいえば権威があり悪くいえばリスクな投資となる生活

を歩むことについての覚悟と期待を感じました。ただ英語はかなりネックで、会話が聞き取れていないのに愛想笑いで済みます場面もたくさんありました。これは本当に良くないし、英語は習得可能な能力であることは間違いないので、必要な努力を肅々と続けて行きたいと思います。教授は会話の情報量が多く、15分話すだけで1時間くらい話した気分になりましたし、実際そのくらいの情報量をやり取りしていると思います。

私の英語能力では得られる情報が限られていたと思いますが、感じた雰囲気としては Princeton は長閑で研究に集中している感じ、Yale は chat を大事にしている感じ、Northwestern は東大と似ていて理論専攻の学生と教授が Department 全体を動かしている感じがしました。私は研究をどのようにパッケージングするかが弱く、それは chat によって鍛えられるので Yale が最も良いと考えました。Yale に進学することを決定した後、Princeton にしなかったことに驚く先生もいらっしゃいましたが、どちらの選択でもそのような反応は多少受けるはずで、自分なりに納得していればそれで良いかなと思います。少なくとも、他の人を満足させるために選択を行うことだけはやめて、自分なりの軸を持つことが重要だと思います。

7 最後に

今回の出願に関して私は多くの人に支えていただきました。家族は常に私の目標を応援してくれました。推薦者の先生方には学部3年生の頃から学部ゼミや授業、その他研究活動で常にお世話になりました。学部の同期がいなければ私は出願を目指していませんし、その後も学部の同期は強い刺激とモチベーションを与えてくれました。共著者の先輩も本当に優秀で研究をどんどん推し進めてくれましたし、私が悩んでいることを常に聞いてくれました。船井情報科学振興財団の方々も私を暖かく迎えてくださりサポートをしてくださいました。

これまでも既にそうだったのだと思いますが、私の人生は私だけのものではなく、皆さんの支えに恥じないようにすべき共有物です。皆さんの支えは何か言葉やプレゼントで恩返しできるようなものではなく、私の今後の行動によってのみ応えられるほど大きなものだったのです。私がイエール大学というトップ校に合格して良かったのか、研究者としてうまくやっていける素地がきちんとあるのかについてはやってみないとわかりません。ただそんなことは実はあまり関係なく、今まで支えてくださった方々への恩返しの意味で死に物狂いで努力していくことが私の責任なのだと思います。とはいえ、これからの充実した日々を楽しんでいこうと思います。